

議事概要（令和5年度愛知県陶磁美術館運営会議）

委員：これまでは陶磁美術館という名前から偏った展示になりがちだった。特別展「アーツ・アンド・クラフツとデザイン」は、やきものも含めつつ、一般に対して、これまでにないアートのアプローチができたのではないか。例えば、アール・ヌーボーと縄文など、一般に興味・関心が高いアートと掛け合わせた展示をすると来館者が望める。美術館としてどのくらい陶磁器を離れてアートの部分を強めた企画ができるかが、今後の課題になるのではないか。

座長：「アーツ・アンド・クラフツとデザイン」では、アートを強く意識した。これまで美術館に来たことのない潜在的な来館者にアプローチした展示を企画しながらも、「平安のやきもの」展のような館としてやるべき展示も行っていかなければならないと感じている。

委員：博物館・美術館にあまり足が向かない要因としては、広報活動に問題があるのではないか。広報活動としてTwitterやInstagramが挙げられているが、若い人を取り込むためのアピールは今後も広報を続けていく必要がある。

委員：ナイトミュージアムの報告があったが、最近では東海エリアでも夜の博物館、水族館、動物園も充実しており、家族連れなど新しい客層を取り込む一因となっている。近年は猛暑の影響もあり、夜の涼しい時間に動く人も多い。時間外にはなるだろうが、新しい試みも効果があるのではないか。

委員：陶磁美術館は日本最大のやきもののミュージアムであり、パートナーシップ大学である愛知県立芸術大学陶磁専攻は、専任教員も充足した日本最大の陶磁器教育機関である。しかしこの二つが連携できていないのは問題である。パートナーシップ大学として展示を見るだけでなく、もっと違った連携も考えるべきではないか。陶磁美術館では、質の高い展示や体験や経験、ワークショップが地域の独自性を持って行われている。そこに学生や教員が関わりを持っていけないだろうか。陶磁美術館の研究と関わっていければ、陶磁器研究の知識を持った陶芸家として学生が羽ばたいていける可能性がある。また、陶磁美術館は子どもの教育に力を入れているように見える。小学校や中学校、高校での美術・音楽教育の時間が減らされていっていることに大学では危機感を覚えている。大学が子どもの美術教育に何か役割を果たせるのではと考えているが、そういう視点でも大学と美術館は連携できるだろうと感じる。また、アール・ブリュットなどの幅広い芸術表現の取り組みとも、連携できるのではないか。

委員：予算について、令和4年度は光熱費の高騰があまり負担になっていないようだが、どのように調整したのか。

事務局：光熱費の高騰は、当初予算ではまかないきれなかった。他で出た予算の執行残を光熱費に回し、全体の予算内でやりくりをした。他の県立の施設では補正予算で必要額を上積みしたところもあり、当館は内部でうまく調整できた。

委員：今から20～30年前までは貿易のために瀬戸のノベルティがたくさん海外に輸出されていた。ところが、最近は「瀬戸ノベルティ」は死語になりつつある。こういった中で南館のテーマ展で瀬戸ノベルティを扱うことは意味がある。テーマ展で扱ったウイスキーボトル等以外にも良いものはもっとたくさんあるので、様々なノベルティの歴史等を展示し、続けていってほしい。

座長：寄贈品の中にもノベルティのデザイン画があるので、また新しく色々な展示ができる。期待して欲しい。

委員：美濃加茂市民ミュージアムは町から近いこともあり地域に直結して、市民が来館しやすいを意識している。講座やグループの活動も盛んである。また、学校との連携として、年2回以上館を利用しており、館を利用した子どもたちが大人になってまた館にやってくる。長期的にみて愛される館になれるかが、重要なポイントではないか。

4月から施行された博物館法の改正で「連携」が非常に大きなキーワードである。陶磁美術館では愛知県児童総合センターと、海上の森との連携は地域の特徴を出せるもの。可能性を非常に感じる。

事務局：地域には魅力的な施設や教育館があるので、そこと連携して事業を重ね合わせることで広がりを持たせることができるのではないかと考えている。児童総合センター、海上の森はやきものと自然環境という中で強いつながりがある。道路を挟んだ向かい側には瀬戸つばき特別支援学校があり、障がいのある方の創作活動が学校を出た後も続けていけるか、モデルプランを作っているのではないかと考えている。他にも、愛知県立芸術大学、ジブリパークの世界とも重ねていき、地域の文化的豊かさを実感できるようにしていきたい。

委員：陶磁美術館利用者の状況（資料1-3）を見ると、瀬戸市から展覧会を見に来ている人が非常に少ない。歴史のある瀬戸のやきものの仕事の展覧会としては課題。やきもの産業に夢を抱けるような環境を作っていかなければ

ならない。地に足をつけて生きてきた瀬戸の陶工たちのプライドやたくましさといったエネルギーが、コロナ禍を経験してダウンしているように感じられる。千年以上続くやきものの町なので、職人がいて大将がいて、この窯元は良い作品が生まれてくる、という流れを作っていけると良い。

座長：陶磁美術館としては、まず瀬戸の人にとって誇りになっていかなければいけない。その上で愛知県の人にとっての誇り、国の誇りにしていきたい。

委員：瀬戸は火の町、土の町、陶磁器で成り立ってきた町。地場産業といえば陶磁器で、市民の多くも陶磁器に携わる町だった。そういう場所にある美術館には期待している。リニューアルは大きなチャンスである。瀬戸や長久手の近隣の子どもたちは遠足で館を訪れるが、館に対して固定化されたイメージができてしまっている。瀬戸市からの来館者数が少ないことはそこにも原因があるように思う。大きくイメージを変えることも必要ではないか。近隣の人々にとって、新しい風が吹いたと感じさせることができると良い。

座長：常設展は変わらないというイメージも持たれている。今回の工事は施設の長寿命化がメインであり、施設が大きく変わることはない。しかし、学芸課のメンバーが新しい物を作ろうとしている。瀬戸市民の誇りとなるように努力していく。

委員：昔は瀬戸市の小中学校で土をいじって作品を作る授業があった。子どもの頃から陶芸体験を自然にしていた。現在瀬戸市内の小学校の窯は、ほとんど動いていない。子どもたちが気軽に土に触れ合う機会を作って欲しい。

座長：やきもの専攻以外の、美術の専攻や教員を目指す学生にも館に関わって欲しいと考えている。美術の教員が陶磁美術館で学び、やきものの面白さを伝えていけるようにしていきたい。

委員：陶磁美術館と愛知県立芸術大学の関わりは、昔は敷居が高かった。今は違ってきているので、可能性を感じる。

座長：コロナ禍でも学校団体は一定の需要があったので、伸ばしていけるのではないかと感じる。学校現場で何が望まれるのか。

委員：瀬戸のやきものは文化や伝統、産業として非常に大切にされてきたことは感じるが、当地を離れるとその認識は薄いように思う。デジタルで情報は

すぐに集まるが、本物が持つ質感や感動は自分の目で確かめるしかない。本物に触れる機会を企画して欲しい。遠足でも候補に挙がるが、陶芸は敷居が高い。学びの形を変え、展示を見ながら動物を探すなど、わくわくするような展示、見学の仕方を考えて欲しい。モリコロパーク見学の延長線上で体験できるような短時間のワークショップなど、色々な学びの形で学校と連携できると良いのではないか。

委員：東海の方は誇りを持っているが、外へのアピールがうまくない。

南館の「もっと伝えたい愛知のやきもの」は特に県外の人にとって面白い展示だと感じる。現在伝統工芸の世界で、今も日常生活の中で使われているのは陶磁器くらいのものではないか。陶磁器まつりは大勢の人が集まり、ポテンシャルがある。陶磁器は「見る」と「使う」の二つの視点がある。企画展「酒のうつわ」や特別展「アーツ・アンド・クラフツとデザイン」は、「使う」という視点がある展示やワークショップがあった。これは女性にアピールできるものであり、これからも持っていて欲しい。また、愛知県はやきものをもっとアピールするものを作り、他の地方から来た人に発見になるような展示があると楽しい。

ICOM（国際博物館会議）の新しい博物館定義が発表され、博物館法の改正もあり、近年注目されているのが、インクルーシブとウェルビーイングの2点。多くの人に門戸を開いて多様な人々のアクセスを可能にし、そこで得る幸福な時間にどのようなあり方があるかと考えたときに、陶磁は土をいじり、作る、鑑賞する、大きなアプローチの幅がある。さらに広大な緑の敷地があり、これからの時代の博物館・美術館が目指すものを実現するための資産を多く持っている。リニューアルに期待する。

展示ケースの照明の有り様は課題である。LED化が初めてということで驚いた。陶磁美術館のポテンシャルをいかに魅力的に発信できるか、愛知県にはそれを支えるように頑張ってもらいたい。

委員：作家としての意見ではあるが、今回瀬戸常滑陶芸協会展は、展示室入り口から左側が瀬戸、右側が常滑という陳列になり、瀬戸と常滑の体質の違いが現れ、非常に面白かった。色々な物が平均化されていく中で、自分たちのアイデンティティは、風土が培ってきた文化はとても大切ではないかと感じる。